

独立行政法人日本学術振興会 先端研究拠点事業 - 拠点形成促進型 -
平成16年度 実施計画調書 (採用番号 16004)

1 研究交流課題名 21世紀の「開発支援と法」研究

研究交流課題に

係るホームページ：http://cale.nomolog.nagoya-u.ac.jp (掲載準備中)

2 経費支給期間 平成 16年 4月 1日 ~ 平成 18年 3月 31日 (24ヶ月)

3 実施組織

日本側

日 本	研究拠点機関名	国立大学法人 名古屋大学
	コーディネーター 職・氏名(フリガナ)	教授 鮎京 正訓 (アイトヨウ マサリ)
	協力機関名 (機関数)	名古屋大学法政国際教育協力研究センター (1機関)

相手国側

ア メ リ カ	研究拠点機関名	ウィスコンシン州立大学
	コーディネーター 職・氏名(フリガナ)	教授・研究センター長併任 Charles R. Irish (チャールズ・アイルッシュ)
	協力機関名 (機関数)	ロー・スクール付置東アジア法学研究センター (1機関)

ア メ リ カ	研究拠点機関名	コーネル大学
	コーディネーター 職・氏名(フリガナ)	教授・所長 Thomas R. Bruce (トマス・ブルース)
	協力機関名 (機関数)	ロー・スクール付置法情報研究所 (1機関)

ス ウ エ ー デン	研究拠点機関名	ルンド大学
	コーディネーター 職・氏名(フリガナ)	教授 Christian Hathen (クリスチャン ハテン)
	協力機関名 (機関数)	法学部 (1機関)

4 全期間（経費終了後5年間を含む）を通じた交流目標

1. 法整備支援事業に関係する日・米・欧の国際的なネットワークの形成の上に、新しい学問領域である「法整備支援学」を構築します。
2. 名古屋大学を含む研究拠点（ハブ）を結んで、国際的な法学教育・訓練体制の基盤を整備します。研究と実務の双方を担当できる人材養成を可能にするカリキュラム開発とその実施のためのパイロットプロジェクトの始動に着手します。
3. 法令その他の法情報の国際的共有のための国際的な情報処理基準の生成の基礎を確立します。

5 前年度までの交流活動による目標達成状況（平成15年度採用のみ記入）

1. アジア諸国に対する法整備支援活動を行っている欧米諸国の研究機関とは、とくにここ5年の間、意見交換や議論を内外の国際シンポジウムで頻繁に行ってきました。
2. ウィスコンシン州立大学ロー・スクールとは、昨年、専門技能教育に関するシンポジウムを行い、今年度は、遠隔教育まで射程を広げて、ITを活用した専門教育方法の研究を目的とするシンポジウムを開催します。法情報の共有方法についての検討も進めています。
3. ルンド大学とは、毎年、研究者交流を行い、比較民主政治研究の一環として法整備支援について研究協力を進め、さらにその展開を図ることで合意しています。

6 本年度の交流計画の概要

（共同研究） 基本方針の確定

ウィスコンシン州立大学ロー・スクール(UW)およびルンド大学法学部との間で共同研究運営委員会を立ち上げ、共同研究の基本方針を確定します。名古屋大学は、支援対象国との共同研究を核にした支援事業や情報技術を活用した法学研究・教育、UWは、南アメリカ、アフリカ、東欧、東アジアにおける法整備支援の実績と遠隔教育、ルンド大学は、現地教育と国際的インターンシップ教育や法情報データベース構築の面で成果を挙げています。そこで、これらの特徴を統合できる研究計画をたてる一方、通信回線を利用した継続的な研究協力・分担の体制を整備します。

（セミナー） 過去の「法と開発」研究の総合的評価と将来の研究計画の策定に向けて

「法と開発」は、第二次大戦後、アメリカ合衆国が先鞭をつけました。しかし、この事業と研究は、必ずしも成功したわけではなく、事業を支えた理論を見直す必要があります。そのため、本年、10月に名古屋で国際会議を開催し、過去の「法と開発」理論の抜本的な検討作業を行います。その成果に基づいて、共同研究の研究プロジェクトをさらに洗練します。

共同研究体制を組む機関からの参加者に加え、法整備支援対象国から、要となる立場の研究者や政府関係者の参加を得ることのできるセミナー等を開催し、法整備支援学と法整備支援事業に必要とされる幅広い人的ネットワークの構築を目指します。

（研究者交流） 長期的な信頼と協力を支える体制の構築

法整備支援事業は、法学・政治学の内部だけでなく、社会科学、工学、人文科学などの専門家と密接に協力してはじめて成果を挙げることができるものです。そこで、国境を越えた研究者相互の密接な信頼と協力関係、若手研究者間のネットワークの形成、内外の専門家間の連携体制を整備することが、今年度の「研究者交流」の目的です。3大学の間には、これまでも交流がありましたが、その充実にとくに力を入れます。